

木簡など出土文字資料釈読支援システムの高次化と
総合的研究拠点データベースの構築

わたなべ あきひろ
渡辺 晃宏

（国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・史料研究室長）

【研究の概要等】

本研究は、歴史研究に重要な役割を果たすようになった木簡など出土文字資料に関する情報と知を蓄積し、それを広く共有できる体制を築くとともに、検索力を飛躍的に高めて増加したデータを有効に活用できる環境を整えることを目的とする。

木簡の文字は、欠損や劣化により不完全な状態にあるのを特徴とするため、その解読には十分な知の蓄積と活用が欠かせない。そこで、これまでの研究によって開発した二つの木簡釈読支援のための情報処理システム－木簡釈読支援システム「Mokkan Shop」と、木簡の文字画像データベース「木簡字典」－を踏まえて、①釈読支援システムの高次化－認識精度と検索技術の飛躍的向上、関連するさまざまな知識の蓄積・活用、空間的・時間的な制約を超えた作業支援ネットワークの構築、②総合的研究拠点データベースの構築－時代・地域を超えた木簡情報の拡充、文字以外のデータを含めた木簡情報の表現方法の標準化、出土地点・遺構の情報とのリンク、研究文献データベースとのリンク、を図る。

さらに、「新Mokkan Shop」と「新木簡字典」を統合し、木簡など出土文字資料に関する情報と知の共有化を実現することによって、木簡情報の蓄積が新しい解読を生み新しい解読が木簡情報の蓄積を実現する、という知の流れを作り上げたい。

【当該研究から期待される成果】

「新Mokkan Shop」と「新木簡字典」を統合することによって、木簡など出土文字資料に関する総合的研究拠点機能が構築できれば、出土文字資料研究の環境の飛躍的向上が実現するばかりでなく、歴史研究、特に日本古代史研究の加速度的な発展をもたらすことが期待できる。また、墨書土器・漆紙文書など他の出土文字資料研究への応用、国内の文献史料研究拠点との連携のほか、中国・韓国など東アジア漢字文化圏、ひいては世界の文字資料研究への応用も可能になり、世界的にも類例のない総合的歴史資料研究が実現できると考える。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

- ・渡辺晃宏『平城京と木簡の世紀』（講談社版日本の歴史04、2001年）
- ・末代誠仁・中川正樹・馬場基・渡辺晃宏 他「木簡解読支援のための文脈処理」（『情報考古学』Vol.13 No.1、2007年）

【研究期間】 平成20年度－24年度

【研究期間の配分（予定）額】

104,000,000 円（直接経費）

【ホームページアドレス】

<http://hiroba.nabunken.go.jp/>